

警察職員による

被害者支援手記

平成30年度版

警察庁

犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者は、犯罪による直接的な被害だけでなく、その後には生じる様々な問題により精神的被害など多くの被害に苦しめられます。犯罪被害者が、こうした被害から回復し、再び平穏な生活を営めるようになるためには、様々な支援が必要です。

この冊子は、全国警察の第一線において、犯罪被害者の支援活動に当たる警察職員から寄せられた「手記」を、警察庁犯罪被害者支援室が取りまとめたものです。

ここに収めた手記には、犯罪被害者がどのような状況に置かれ、どのように苦しんでいるのかの一端が現れているほか、個々の犯罪被害者に真摯に向き合い、時には共に涙しながら、犯罪被害者の立場に立ってその様々なニーズに応えるべく努力している警察職員の姿が記されています。

この冊子が、犯罪被害の実情や犯罪被害者を支援することの重要性などについての理解の一助となることを願っております。

平成三十一年二月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 内藤浩文

目次

『二期一会』 ～似顔絵捜査員として～	警察本部勤務	副主査	……………	1
被害者支援の答えを探して	警察署勤務	巡査長	……………	4
「すべては被害者のために」	警察署勤務	巡査長	……………	7
強いところ、寄り添う優しさ	警察署勤務	巡査部長	……………	10
あたなの宝物は何ですか	警察署勤務	警部補	……………	13

※警察では、

◎性犯罪、少年、悪質商法、暴力団、交通事故等に関する各種相談については
全国統一の相談専用電話「#（シャープ）九一一〇番」

◎性犯罪被害相談については、各都道府県警察の性犯罪被害相談窓口につながる
全国共通の相談専用電話「#（シャープ）八一〇三番」

により受け付けています。

『二期一会』 ～似顔絵捜査員として～

警察本部勤務 副主査

「おねえちゃん、またね！」

女兒が満面の笑みで小さな手を大きく振っている。何度も何度も振り返る彼女に「またねはないよ……。」と心の中で思いながら、

「今日はありがとう、元気でね！」

と私も負けないくらいに笑顔で手を振り返す。

「もう会えないなら、せめて最後に抱きしめてください。」

目に涙を浮かべながら、体を寄せてきた女性もいた。

握った手をなかなか離そうとしない女性もいた。

時間が許すのなら、もっともっとそばにいて、彼女たちの笑顔の裏にある「助けて。」の心の声に耳を傾けてあげたい。『性犯罪』という誰にも言えない孤独と闘い、藁をもすがす気持ちで訪れた『最後の砦』が警察だったのだろうか。

「どうか心から笑える日が来ますように。」と祈り、帰宅していく姿を見送っている。

私は現在、似顔絵捜査員として勤務している。任務は事件発生後、要請のあった警察署に向かい、犯人の似顔絵を作成すること。被害者の記憶が鮮明なうちに、犯人

逮捕の手がかりとなる特徴を聞き出し、絵に残す。彼女たちの記憶が頼り、それも、心に深い傷を負わせた思い出したくもない犯人の記憶である。

今まで男性警察官のみで構成されてきた係に、初の女性、初の行政職員として着任した。当然、第一線での捜査経験もないし、被害者支援要員に指定されたこともない。

私が被害者と接することができるのは、似顔絵を作成しているほんの1～2時間程度。似顔絵が完成すれば、被害者とはお別れである。

自分自身の限られた任務にもどかしさを感じながらも、強い信念だけは持ち続けている。それは、被害者の『心』に親身に寄り添い、生きる『ささえ』となれる似顔絵捜査員でありたいということ。

「ママには内緒だけどね、この間、野良猫を家に入れてちゃった。」

「じゃあ私たち二人だけの秘密だね？」

「うん、秘密だよ！」

あどけない顔でにつこり笑う、彼女はまた小学生だ。数分前、お母さんに手を引かれ、不安そうに警察署にやってきた。

「お母さんがいなくても大丈夫だよね？」

できれば彼女と二人きりになりたい私の気持ちを察してか、お母様は席を外してくださった。泣きそうだった彼女が笑顔で打ち明けてくれた内緒話に、ほっと胸をな

でおろしたことを覚えていた。

事件は、路上で遊んでいたところ、知らない男に抱きつかれ、「こういう遊び知ってる？」とわいせつな行為をされたというもの。

「バッグを斜めにかけていて、ここにこういうのが付いているの。」

「パーカーから出ている紐は、左側が長く出ている、右側はバッグの下に挟まっているの。」

「唇はカサカサだったよ、目はねえ…。」

次から次へと懸命に伝えてくれる犯人の情報に、私も真剣に耳を傾け、犯人につながるのなら一つも漏らさず絵に残そうと必死にメモを取った。彼女の協力のおかげで、犯人の顔や全身像、所持品等、四枚の絵を完成させることができ、後に、まさに彼女の記憶どおり、似顔絵どおりの男が検挙された。

子供の記憶力、観察力には毎回驚かされると同時に、こんなに幼いうちから被害の記憶が刻まれ、大人になるにつれて、された行為の内容を理解していくのかと思うと、胸がしめつけられる思いがする。

似顔絵捜査員の私が一緒に過ごせる時間はほんの僅かだけけれど、絵を描くのが好きな子とは一緒に絵描きをし、歌うのが好きな子とは一緒に歌も歌う。警察は怖い場所でも叱られる場所でもなく、助けてくれる温かい場所なんだと記憶してくれることを願って…。

『寄り添う』

よく耳にする素敵な言葉だ。でも、我々警察は、本当の意味で、寄り添うことができていたのだろうか。私がそう感じる出来事があった。

似顔絵の要請を受け、向かった署にいたのは幼い女の子、すでに時刻は夜八時を過ぎており、眠たそうにぐったりしていた。

「こんばんは、お腹空いたでしょう。」

と声を掛けると、彼女は

「うん…。」

とうつぶいた後、

「でもあそこに、食べ物×って絵が貼ってあるよ。」

と室内に貼ってある禁止事項の貼り紙を指差しながら教えてくれるのだった。貼り紙を見てずっと我慢していたのかと思うと、いたたまれない気持ちになり、

「特別に許してもらおうから待っててね。」と伝え、担当の刑事に声を掛けた。隣にいたお母様の安堵の表情が今でも忘れられない。

事件直後、早期に似顔絵を作成することは、今後の捜査に非常に有効ではあるが、それは警察側の都合や発想である。何よりも、今、目の前にいるのは、計り知れない心の傷を負っている被害者であり、年齢、体調、置かれた状況もみな違うということを忘れてはならない。時間に追われる第一線の捜査では、目の前の処理や犯人を捕まえることを優先し、被害者の心情に目を向ける余裕がつい欠落してしまうこともあるのだろう。

私は警察官のように事件捜査そのものは担当できないけれど、女性ならではの視点、国民により近い目線で寄り添うことはできる。私にしかできない私らしい支援、気が付いた人が気が付いた支援をする、それも被害者支援と言えるのではないだろうか。

私が被害者に、最初に掛けている言葉がある。

「よく来てくれましたね。とても勇気のいることだったと思いますよ。似顔絵は描けそうであれば描きますね。思い出すのがつらかったら、無理しなくていいんですよ。」
警察職員として、ではなく、一人の人間として、共に生きる女性として、相手が子供であろうと伝えている私の思いである。

捜査に協力してくださいることに心から感謝をし、署の捜査員と連携し、与えられた任務の中で、これからも精一杯の支援をさせていただきたいと思う。

被害者からいただいた大切な手紙がある。

『この度は、警察の方々のお陰で、犯人を逮捕していただきました。本当にありがとうございます。事件後、男性と会うことに、不安や警戒心がありましたがお会いできたのが女性の方でホッとしました。』

犯人の特徴を上手く表現できない私に対し、焦らずことなく丁寧に対応していただき、出来上がった似顔絵は犯人にとっても似ていて驚きました。

「被害を訴えることさえできない人が多くいると思います。本当は事件のことなんて思い出したくないだろうけ

ど、こうして勇気を出して来てくれたのだから、そんな犯人は捕まえましょう。」
と言ってくれましたね。

私のようなちっぽけな被害で、警察の方にお世話になつていいのかと思っていました。そんな言葉をかけていただき、警察の方に頼っていいんだと思えました。私が被害を訴えることで、これ以上被害者が増えなければいいと思えるようになりました。

逮捕までの長い捜査の中で、お会いしたのは一度きりでしたが、私の中では存在がとて大きく、感謝の気持ちでいっぱいです。」

手紙の中での懐かしい再会に、嬉しくて涙が止まらなかった。捜査経験もなく、突然刑事の世界に飛び込んだ私を支えてくれていたのは、実は被害者である彼女たちなのではないだろうか。彼女たちの言葉に、私自身が励まされてきたように感じている。

性犯罪は犯人が捕まれば終わるわけではない。忘れることもできないだろう。でも自分の胸に押し込めて生きていくより、向き合う勇気を持って闘ったことに、私は同じ女性としてエールを送りたい。

「勇気を出して警察に来てくれて、本当にありがとうございます。」

被害者支援の答えを探して

警察署勤務 巡査長

交通警察官として勤務していて、一番辛い事は皆同じだと思う。

「交通死亡事故」これに尽きるのではないだろうか。

交通課には、交通事故捜査係・交通指導取締係・交通規制係・交通安全教育等を担当する庶務係といった多様な仕事があるが最終的な目的は、交通警察官であれば皆同じだと思う。

「一件でも悲惨な交通事故をなくす為に。一件でも交通事故で悲しい思いをする人をなくす為に」

綺麗事抜きにその為に皆、春夏秋冬昼夜問わずに現場に出ているのではないだろうか。

私が警察官になり初めて携わった交通死亡事故。何年経っても忘れることはない。

被害者男性は五十歳代の男性で、深夜市道の横断歩道を横断中にトラックと衝突。トラックの運転手は現行犯逮捕され、被害者の男性は現場でほぼ即死の状態であった。

私は非常召集をされ、責任者である係長と病院に向かうと、救命治療室のベッドに五十歳代くらいの男性が横たわっていた。救急隊の話によると男性の所持品は、ズボンのポケットに入っていたわずかな小銭、そして右手

に握りしめていた旅行のパンフレットだけだったという。身元を確認出来るような所持品を持ち合わせておらず、男性の身元が分からないまま、やるべき事が押し寄せ右も左も分からない私は、ただこなししていく事で精一杯であった。

午後十時頃だっただろうか。任務が解除になり私は帰宅しようとして、署のロビーに差し掛かった時だった。五十歳代くらいの女性と制服姿の女の子が真っ青な顔をして飛び込んできたのだ。女の子が

「昨日からお父さんが帰ってこないんです。」

と私に訴えてきた。未帰宅の父親の外出時の状況や服装等を聴取すると、昨日の事故の被害者と酷似していた。一緒に聴取していた係長が、私に目で合図をしてきたので間違いないと思った。五十歳代くらいの女性は女の子の母親であり、母親が

「近所の人から身元不明の死亡事故があったと聞いたのですが、うちのお父さんじゃないですよ。」

と聞かれ私は何も言えずにいた。係長が状況を説明し被害者のお顔を確認をして頂くべく、被害者が眠る場所に案内をした。ご遺体を確認した瞬間泣き崩れる母親と女の子、女の子は取り乱し過呼吸を引き起こし倒れてしまった。すぐに救急要請し、母親は今後の捜査状況等の説明を受けて頂く為に署に残り、病院には私が付き添うことになった。

搬送される救急車の中で彼女は、

「お父さん」

と繰り返しつつおやき、私は掛けてあげる言葉もなく手を

握ってあげることしかできなかつた。

病院で少し休むと彼女の体調は回復した。母親が迎えに来るまでの間、私は彼女と個室で二人きりであった。空気が重たく時間の流れがやけに遅く感じた。彼女は仰向けで天井を見つめたまま涙を流していた。無力な私はそこでも何も声を掛けられずに側に座っていた。すると

「お父さんと喧嘩をしたままなんです。」

彼女は小さな声で話し始めた。彼女の父親は、仕事人間のお忙しい方でなかなか家族との時間を取れないでいた。母親と娘との休日の約束を何回もキャンセルしており、あの事故の前に喧嘩になってしまったとのことであった。娘は

「いつも仕事じゃない。旅行くらい連れて行ってよ。」

と父親にぶつけ、喧嘩から逃げるように父親は外出したので、出ていく父親に

「大嫌い。」

と叫んだそうだ。娘は

「最後の言葉が大嫌いなんで、私が悪いよね。」

と自分を責め続けた。私は

「そんなことないよ。」

と言ってあげることが精一杯で、彼女の話の間ごとと聞いてあげようとそれだけを考えていた。彼女の話の聞いていたのか分かつた。きつと父親も大事な家族を旅行に連れて行きたかつたのだろう。どんなに悔しかつただろう。家族を喜ばせようとパンフレットを何処かで手に取っている様子を思い浮かべると涙が出そうになつた。いや、

不覚にも涙が出ていたかもしれない。

娘にパンフレットのことを伝えると、彼女は嗚咽を漏らし涙を流した。病院に迎えに来た母親と一緒に帰る娘を見送りながら、私は彼女達に何が出来るのかを考えた。四十九日が終わり、所持品をお返しに自宅にお伺いすると、娘は不在で母親が一人で対応してくれた。パンフレット等をお返しすると、母親は

「きれいに預かつて頂きありがとうございます。」

と言い、パンフレットを仏壇にお供えした。お線香をあげ帰る時に母親が

「娘が婦警さんにお礼を言っていました。」

と言われ、私は彼女に何もしてあげられていないのにと引つ掛かるものがあつた。遺族調書を取る時に母親の希望で私が取ることになつた。録取した調書を係長に見せると

「お前の調書は、可哀想可哀想ばかりで、被害者の無念とか被疑者に対する強い処罰意志が伝わらない。警察官としての調書じゃない。」

と強く言われた。

係長の真意が全く伝わっていなかった私は、それから暫くして、気になつていた娘に元気かどうか電話をしてみようかと係長に相談すると

「その電話でお前はすつきりするかもしれないが、彼女にしてみたら警察から電話が来る度に事故のことを思い出すんだぞ。」

と言われ、係長は死亡事故に慣れているから被害者の気持ちも考えないのではないかと思ひ、課の先輩に相談す

ると

「知っているか。係長が出勤前に事故現場に供養のお花を持って行ったことを。」

と言われ、私はそれまで被害者の為と言いつつも、自分のエゴでやっていたのかもしれないと自分の安易な考えが情けなくなつた。目に見えるものだけが優しさではないのだ。現に係長のような目に見えない優しさ、一番悔しかったであろう被害者御本人に対する敬意の気持ちなど私にはなかつた。

被害者支援とは何だろうか。被疑者を捕まえることが一番の被害者支援と言う人もいれば、相手の気持ちに寄り添うことが一番だと言う人もいる。警察官それぞれに信念があるように、被害者に対する対応も一人一人違うと思う。常に私達は人の生死に関わる仕事をしていて、それは人生に直結していく。

だから自分たちの保身やエゴの為ではなく、被害者一人一人に向き合っていないといけない。

交通事故で大事な家族を失う。どんなに被疑者が処罰を受けようとも、私達警察官が側について寄り添つても、大事な家族を帰してあげることが出来ない。事故が起きる前の生活に戻してあげることが出来ない。だからこそ日々出来ることを私達警察官はやつていくしかないのだ。あれから十年以上経っているが未だに明確な答えが出ないまま今も模索している。交通死亡事故が起こる度に考える。どんな被害者にも大事な家族がいる。被害者の無念をはらすことが出来るのが警察官であるが、警察官も一人の人間であることは変わらないのだから、人と

して被害者の気持ちに寄り添うことは大きなことではないだろうか。

あの時の彼女は幸せに暮らしているだろうか。

私が初めて携わつた死亡事故。無力な自分に葛藤する日々であつたが、一年後そんな私に通の手紙が届いた。あの時の娘さんからであつた。封筒の中には写真が一枚、同封されており、旅行先で撮影したと思われる写真で、嬉しそうな母娘のツーショットと娘の腕には父親の遺影が抱かれていた。手紙には

「ありがとうございます。病院で婦警さんが側にいてくれて救われました。」

と書かれていた。それを読んで葛藤が消えていく思いであつた。

被害者支援に答えなんて必要ないのかもしれない。だからこそ、その答えを模索するために皆必死になるのだ。それが一番被害者のことを考えることであり、気持ちに寄り添うことだ。

私達警察官が取り扱う事件事故は多種多様であり、日々多くの方々と接する。でも決して日々の業務に慣れてはいけない。そこには多くの方の人生が携わつてくる。

交通警察官として私が出れることは微力なことかもしれない。でもその力が少しでも多くの人が無事に大事な家族の元に日々帰ることができるようになりたいと思う。

あの日の写真の母娘の笑顔が今も続いていることを願ひ、私はこれからも被害者支援の答えを探していく。

「すべては被害者のために」

警察署勤務 巡査長

私は、性犯罪被害者です。

夕暮れの帰り道に一人で歩いていたら、背後から突然抱きつかれ、わいせつな行為を受けたのでした。

当時、私は、まだ若かったこともあって、ミニスカートの姿で露出の多い服装で歩いていました。

さらに、耳にはイヤホンを入れて、音楽を聴きながら歩いていたので、後ろから近づいてくる犯人には、全く気付けませんでした。

まさか自分がこのような被害に遭うとは思っていませんでした。とても驚いたのと、恐かったのと、犯人に対する怒りを覚え、また、それと同じくらい、無防備な格好で歩いていて自分をただひたすらに責めました。

私が被害に遭ったのは、こんな格好で歩いていたらなんだと、自分に非があつたことを反省したのでした。

とても、警察になんて言えませんでした。このまま自分が我慢すれば、誰にも何も迷惑を掛けることはないと思つたのです。

現在、私は、警察署の刑事第一課強行犯係として各種事件の捜査に当たり、犯罪被害に遭われた方々への被害者支援にも携わる機会を数多くいただいています。（私が性犯罪被害者であることは、ごく限られた職員しか知り

ません。）

私は、警察官になって、性犯罪の発生が思った以上に多いことに驚きました。

思った以上とは、どのように思っていたんだと言われそうですが、一口に性犯罪と言っても、決して、テレビドラマや映画のワンシーンで見えるような被害だけではない。性犯罪被害の実情を目的の当たりにしたのです。

そして私は、あの日、自分が警察に言えなかったように、警察が認知していない性犯罪の被害を受けている方が少なからずいるという現状も決して忘れてはならないと、これまで犯人逮捕に一喜一憂することなく捜査に従事してきました。

性犯罪被害者の特徴のひとつとして、世の中の性被害に対しての誤解と偏見が根強いことから、被害者は事件に対する自責感を強めてしまう傾向があげられます。

「性犯罪は若い女性だけが被害に遭うもの」とか、

「挑発的な服装が性犯罪被害を招く」

「抵抗すれば性犯罪は防げる」

など、社会には性犯罪被害者が相談することを困難にしてしまう誤解が根強く残っているのです。

私は、性犯罪被害者支援に携わる全ての者は、先ず、これら偏見を、社会から払拭する働きかけをすべきであると考えます。

たとえば、このような警察部外向けの資料に、被害者の声を代弁し国民の性犯罪被害に関する理解を促進することも、被害者支援に携わる者としての重要な役割のひ

とつだと考えます。

被害を受けた方々は、犯罪の被害者であるにもかかわらず、被害に遭ったことで、不安や恐怖感、自責感などの精神的苦痛や、その後の生活に支障が生じたことで転職や転居を強いられる場合もあり、経済的な苦痛も受けているのが現状です。

警察が行う被害者支援とは、このような、被害に遭遇してしまっただけの方の置かれた状況に対する理解と、被害者に代わって、犯人と対決することこそが、その本質と言えるのです。

とある深夜、成人女性が単独で帰宅途中に、男に襲われるという性的な犯罪が、連続して発生しました。

言わずもがな、犯人の逮捕には、被害に遭われた方の証言が重要となるのですが、被害者の一人は、大きなショックを受けているにも関わらず、通報があつて駆けつけた警察官に対し、淡々と振る舞い、状況を説明し、感情が麻痺しているように思えました。

しかし、捜査が進むにつれて、その被害者は次第に被害に遭った戸惑いや、警察の事情聴取に対する恥部の説明のつらさを感じていったようで、捜査員が、ダミー人形を使用して被害に遭った際の状況説明を求めた時、ついには声を上げて泣き出し、精神的に耐えられない、もう捜査に協力出来ないかと黙り込んでしまったのです。

当時、連続発生した捜査が立て続けに行われており、その時の被害者の周囲には男性捜査員しかいなかったことから、機転を利かせたある捜査員が、他の捜査に従事していた私を呼び戻したのです。

急遽、その被害者の対応を担当することになった私は、何も焦ることはないからと、被害者が泣き止むまで待ちました。

そして、被害者に、私自身が性犯罪被害者であるということをこっそり伝え、驚いたこと、恐かったこと、そして何よりも、犯人に対する憤りを感じていることなど、全く同じようにとは言えないが、今の心情を理解してあげたいと思っていることを伝えたのです。

加えて、捜査員たちは皆、何の罪もない被害者に思いをさせた犯人を許せない、犯人を捕まえて安心してもらいたいという思いで必死に捜査に当たっていること、そのためには、被害者の協力が不可欠であることなど、捜査に対する理解と協力を求めました。

私の言葉をどう捉えてくれたのかはわかりませんが、被害者は、私が被害者のそばを離れないことを条件に、またゆつくりと、男性捜査員が求める捜査に必要な情報を語り出してくれたのです。

また、私は、被害者の支援をさせてもらいながら、自分を責める必要は何一つ無いということも、被害者に繰り返し説明しました。

私は、自分が被害に遭った時、自分を責めるに終わり、警察には被害申告さえもできませんでした。

悔しい気持ちを抱えながらも、自分が我慢すれば、誰にも何も迷惑を掛けることはない、全ては丸く収まると思ったからです。

でも、今になって思うのは、その考えは間違っていたということでした。

実際に、私が性犯罪に遭ったあの日からはもう何年も経ったというのに、私は、あれ以来、スカートをはいて外を出歩けていないし、イヤホンで音楽を聴くことも出来なくなっていました。

そればかりか、私が被害に遭ったあの日が、どういう天気で、どういう時間帯だったのか、被害に遭った場所や犯人の容姿など、時間が経った今でも鮮明に思い出され、忘れることができないのです。

自分が我慢することで、全て丸く収まってなどいまませんでした。何一つ、解決されていないことに、被害者支援に携わる中で、今更ながら気付かされたのでした。

それと同時に、私は、自分と同じような思いを抱き続ける被害者を一人でも減らさなくてはいけないことにも、気付かされたのです。

先程話した、連続発生していた成人女性に対する性的犯罪は、ある男の逮捕で終止符を打ちました。

テレビドラマや映画では、犯人にガチャッと手錠を掛けたらそこで物語は終わってしましますが、現実の世界では、これで終わりということはありません。

犯人逮捕は、被害に遭われた方にとって安心材料のひとつにはなるかもしれませんが、その事件で心に負ってしまった傷は簡単に治るものではないし、もしかしたら一生抱えて生きていかななくてはならない傷になるかもしれないのです。

先程の被害者は、その後、カウンセリングを希望されたので、犯罪被害に遭われた方を支援する専門機関を紹介しました。

このように、被害者が必要とするサポートを、民間企業や支援団体と協力しながらスムーズに進めることも、私たち警察が行う被害者支援のひとつであります。

私は、自らも性犯罪被害者であるがゆえに、被害に遭われた方へのかかわりについては、自分がその立場になったことがあるからこそ理解できている部分が少なからずあると感じています。

ただ、理解していただきたいのは、被害者支援とは、何もかも正解を知っている人がいて支援するわけではなくということなんです。

性犯罪に限らず、犯罪被害に遭った全ての方の悲しみや辛さ、犯人に対する憤りは決して比較できるものではありません。

現在、警察では、このように勇気を持って警察に被害申告をしてくれた方々に対して、被害に遭ったことで負った傷がより深くなることがないように、様々な取り組みがなされています。

犯罪捜査は、それ自体が被害者のために行われるべきものですが、犯罪捜査以外にも、被害に遭われた方が「必要とする支援」を「必要とする時期」に受けられる被害者支援の取組みが懸命になされている現状があり、その背景には被害に遭われた方のためという私たちの強い思いがあることを、多くの方々に理解していただきたいと思えます。

強いところ、寄り添う優しさ

警察署勤務 巡査部長

「遺族のところに行くぞ」

上司からの下命を受け、一瞬ドキリとしました。

今から約十年前、私は新米刑事としてめまぐるしい毎日日々奮闘していました。

そんな矢先、殺人事件が発生したのです。

被害者は職場に押しかけてきた元交際相手に包丁で何度も刺され殺されてしまうという事件でした。

犯人は現行犯逮捕されたものの、被害者の遺体には無数の刺傷がありました。更に逃げる被害者を執拗に追いかけたのでしょう。現場の血痕は一点ではなくあらゆる場所に落ちており壮絶という他ありませんでした。

被害者は私と同じ年の女性でした。

司法解剖にも立会い、改めて事件の凄惨さを実感し、これからこういった事件に携わっていかなければならないのだと自分の進む道の厳しさに対し逃げてはいけなという強い気持ち、そして私なんかがこのような事件を扱っていいけるのか、被害者や遺族の気持ちを受け止めることができるのかとの一抹の不安を覚えていた時期でした。

事件直後は、ショックのあまり調査には応じられないとのことから両親への連絡は必要最低限にしていたのですが、被害者の葬儀も終わり、調査に応じてもよいという連絡が入りました。

そのため、調査作成、被害者支援の説明、証拠品の諸手続き等の必要な捜査を行うため両親の元へ行くよう下命が出たのです。

同系の男性上司、警務課の被害者支援担当職員、私の三人で被害者宅へ向かうことになりました。

私は被害者宅へ向かっている間、遺族の元へどんな顔をして、どんな言葉を使って話をしたら良いのか悩んでいました。

娘が殺され、悲しみの真っ只中にいる両親から再度話を聞くのはとても残酷であり、また、娘と同じ年の私なんかには会いたくないのではないかと心配があったのです。私はそんな迷いを顔に出さずに会えるよう終始自分の任されている仕事に集中することにしました。調査をとるのは上司なのだから、被害者支援の説明をするのは警務の方だから私の仕事ではない、遺族となるべく顔を合わせないよう淡々と作業をしようと思っていたのです。

被害者宅へ到着すると両親が出迎えてくれました。

被害者は両親と姉の四大家族でした。姉は家にはいませんでしたが、リビングに飾られている家族写真の中に結婚式のものがあり、最近結婚をして家は出たのだろう

と推測ができました。

家族写真は姉妹の幼い頃や卒業式、成人式の写真が飾られており、幸せな家族の姿がそこには写っていました。しかし、この部屋で一番新しい写真は被害者の遺影です。

遺影の中の被害者は笑顔でしたが、私の目の前に座っている両親は無表情でこちらが話しかけなければ言葉を発することなく、心がどこか離れていて、家族写真の人物とは別人のようでした。

被害者へのお参りをさせていただいた後、事件の捜査状況や今後の流れなどを説明し、私の担当する証拠品の手続き、警務課職員が被害者支援の制度や手続きについて説明した後に調書の作成が始まりました。

作成に当たり、上司は

「辛いことを思い出させてしまい申し訳ありませんが協力をお願いします。」

と一言を添え、父親から必要事項を聞きとっていました。父親の少し後方に正座していた母親は顔を伏せ、目を瞑り表情を変えることなくその話をじっと聞いていました。

父親は淡々としながらも聴取に応じ、娘を大事に育て成長を楽しむにしていたこと、自分は今年定年退職すること、娘が就職し親としてほっとしていたこと、犯人を許せないこと等を語っていきました。

上司も毅然とした態度で父親の話聞き、引き続き調書を作成し始めていました。

調書を作成し、読み聞かせのため上司が調書を声に出し読み始めました。

読み聞かせが始まりしばらくして父親の後方に座っていた母親が顔を両手で覆い泣き始めました。

私は、娘が殺されてしまったのだ。辛いに決まっている。と、どこか客観的に涙を流している母親を眺めていたところ、読み聞かせの声が詰まるようになってきました。

隣を見ると、読み聞かせをしていた上司が目いっぱい涙を浮かべ、声が出なくなっていたのです。

それでも調書を読んでいたのですが、みるみるうちに目からは大粒の涙がこぼれ、最後は嗚咽を漏らし涙が止まらなくなっていました。

上司が

「すみません。許せなくて。私にも娘が二人いるのです。」
と言うと今まで淡々と対応をしていた父親も下を向き、耐え切れず泣き始めました。

警務課の職員も泣いていました。

私も涙が止まらなくなっていました。

遺族は辛いに決まっていることは分かっていました。そして、私自身も辛いのだということが分かったのです。何の罪もない若い女性が、私と同じ年数生きていた女の子が、かわいがっていた娘が、それぞれ思っている被

害者の将来が一瞬で奪われてしまった、もう戻ってこないという悲しみの共有が構築された時間でした。

何とか調書の読み聞かせを終え、父親から署名をもらっている。

「刑事さん、ありがとうございます。」

と父親が涙を拭いながら言いました。

そして最後に

「よろしく願います。」

と私達をしっかりと見ながら声を振り絞り言いました。

私は自分の仕事の責任の重さを痛感し、被害者と遺族の思いを私達は背負っているのだとの使命を再認識しました。

任されている仕事をすれば良いと思っていたことは被害者や遺族に対して逃げるための理由でした。

上司は逃げず、真正面からぶつかり、寄り添ったのです。

警察は強くなくてはいけません。

強い気持ちが必要なければ犯罪に対して向かっていけないのです。

しかし、同時に被害者や遺族に寄り添える優しさを持たなくてはならないのだとこの出来事から学びました。

被害者支援とは犯人を検挙するだけではない、捜査をするだけではない、制度について説明するだけではない、相手の立場に立ち気持ちに寄り添うことが大切なのではないでしょうか。

強さと寄り添える優しさを忘れず、被害者や遺族の悲しみが少しでも和らぐようこれからも支援をしていきたいと思えます。

あなたの宝物は何ですか

警察署勤務 警部補

「おまわりさんたちはお仕事をしていると、急に亡くなってしまう命に出逢うことがあります。

その命の周りの人たちは、いっぱいいっぱい泣いて、いっぱいいっぱい祈ります。

おまわりさんたちも、何とかもう一度その人を起こしてあげることができないか、一生懸命考えます。

救急隊の方や、病院の皆さんも同じです。

でもどんなに周りの人が泣いても、どんなに周りの人が祈っても、一度亡くなってしまった命を戻してあげることが誰にもできません。

命は一人に一つしかない大事な宝物です。」

現在私は交通総務係長として管内の保育園、幼稚園から小中学校、高校、高齢者の方まで交通安全講習を通して多くの方と触れ合っています。

講習はいつも同じ質問から始めます。

対象が園児であろうと、高校生であろうと、私の講習を何度も受けたことがある子供たちに対してでも同じ質問です。

「あなたの宝物は何ですか。」

今から三十年以上前、私が交通巡視員として警察署に勤務し始めて間もない頃の出来事です。

早朝の交通指導を終えて帰署した私は、一人制服姿で玄関のソファに座って泣いている女子高校生に目が留まりました。

声を上げることなく本当にしくしく泣いているのです。

お母さんが交通事故に遭ったという連絡を受けて、駆け付けた娘さんだと聞かされました。

お母さんは大型トラックの下敷きに・・

母一人子一人の家族だそうです。

ほんのさつき

「行つてらっしゃい」

と笑顔で見送ってくれただろうお母さんの事故の連絡を受け、一人声も上げることでもできず泣いていたのです。

何をしてあげていいのかさえ、私には分かりませんでした。

そんな私は、何故だか自分でも分からないうちに、彼女の隣に座っていました。

高校を卒業して間がない、歳もあまり変わらない私には、そばにはいても、掛けうる言葉などありません。

ただただ、

「彼女を一人ぼっちにしておきたくない。」

という思いから、一緒に泣くのは違うと思ひ、必死に堪えながらそばに座っていたのです。

今でも、あの時の彼女の姿を忘れたことはありません。時が経ち、女性警察官へ身分替えとなり、交通総務係主任として県内Y署に勤務していた頃、当時の交通捜査係長は、交通死亡事故が発生すると、いつも私に声を掛けられました。

「もうすぐご家族が来られるので、そばにいてあげて。」私がそばにいても事故の話をしてあげられるわけではありません。

未だご遺体と対面しておられないときに、ご家族に話せることはありません。

ただただ、そばにいます。そんな私に、残された奥さんが独り言のように聞かれます。

「私が悪いんですよ。」

「私が朝、もう少ししつかり「気を付けて」と声をかけていれば、一分遅く出かけさせれば、主人は事故に遭わずに済んだんですよ。」

「いや、もう少し早く支度をしてあげれば良かったのに。」

そんなわけあるはずもないのに、自分を責めることでしょうか時さえ進められないかのように、ただひたすら

「私が悪い」

を繰り返されるのです。

私はただ黙って奥さんの背中をさすり続けました。

ある時は、事故の説明を受けるお母さんのそばから子供たちを連れ出し、一緒に待っていたこともあります。

「おばちゃんと一緒にジュース飲みはいかがか。」

何をするにも一緒だった仲良し家族。そこにお父さんの姿がありません。

何が起きたか実感できず、泣くこともなくジュースを飲んでいる子供たちと一緒に過ごすのです。

私がそばにいても、これと言って何ができるわけでもありません。

それでも、捜査係長は私に

「ご家族のそばにいて」

と言われるのです。

それはきつと、係長が事件捜査のことを考えながらも、心のもっと深いところで、私が三十年前に感じた「ただただ一人ぼっちにさせたくない」という思いを、いつも持つておられたからだと思います。

交通事故はこれほど多くの悲しみや、苦しみを生み出すものなのに、ともすれば自分の身の回りに起きなければ「お気の毒な他人事」と思われがちのようです。

今多くの人たちに交通安全について語る時間を与えられている私にできる被害者支援は、逝ってしまったなければならなかった方々が、多くの人を愛し、愛されとても幸せな日常を送っておられたこと。

それなのに愛する人たちに「ありがとう」も「ごめんね」

も、そして「さよなら」さえ伝えられずに別れなくてはならなかった。

そんな悲しみを、声なき声を伝えていくことだと思いません。

きっと望んでおられるだろう「こんな悲しみのない社会」を皆で作っていくことを、呼び掛け続けることだと思えます。

ジュースを飲みながら一緒に待っていた子供たちと、交通教室で出会ったことがあります。

私を見つけて胸に飛び込んできた女の子。

こんなかわい子子供たちの成長を、そばで見ることのできなくなつたお父さんの無念はどれ程のものでしょうか。子供たちはどんなにお父さんの「膝の上」が恋しいことでしょうか。

私は思い切り抱きしめました。

子供たちの健やかな成長を願わずにはいられません。

「あなたの命は宝です。」

あなたの命はあなたただけではなく、あなたの周りのお父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんにとつても、自分の命よりも大事な大事な宝物です。

ああ僕って宝物なんだ、私って大事なんだということ。をいつもいつも胸に持って、大事な僕を、宝物の私を傷つけないようにするにはどうしたらいいのかなど、いつもいつも考えながら色んなことができる人になつてくだ

さい。

そしてどうぞ他の人も大切にできる人でいてください。」

そばにいたことしかできなかった私だからこそできる、被害者支援。

「あなたの宝物は何ですか。」

問いかけ続けたいと思っています。

